

英語教育における第2外国語学習の効用について

—外国語学習の意義を中心として—

坂本育生 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

The effectiveness of learning a second foreign language in English education

- Focusing on the significance of learning a foreign language -

SAKAMOTO Ikuo

キーワード：多言語主義、異文化理解、ユネスコ教育勧告

I はじめに

ドイツの詩人ゲーテの格言に「外国語を知らないものは自分の母国語も知らない」という名言がある。¹⁾ 外国語学習の意義は、もちろん実用的な運用能力習得の側面もあるが、それと同時に客観的に自分の母国語を見つめ直し、母国語への理解を深め、自国の文化以外の異文化理解を深めることも重要である。しかしながら、現在の日本の大学等の高等教育機関での外国語教育は、1991年の大学教育設置基準の改定以来、ほとんど英語のみの教育が行われ、第2外国語が必須科目ではなくなった。もちろん筆者は国際語としての英語の重要性は認めるが、歴史的に英語と深い関係をもつドイツ語、フランス語などの第2外国語の教育も、大学外国語教育の重要な要素と考えている。そこで本稿においては英語学習における独仏語を中心とした第2外国語学習の効用に焦点を当て、その有用性を探っていくことを主な目的とする。結論的には英語の理解を深めるためには、独仏語などの第2外国語学習は必須のものとする。

II 現在の大学外国語教育の状況

冒頭に述べた通り、1991年の大学設置基準の改定以来、第2外国語は必須条件ではなくなった。そのため多くの大学において、大学外国語科目は多くの機関で基本的には英語のみとなり、独語、仏語、中国語などは必修科目としているいくつかの大学はあるが、多くの大学において、選択科目の領域に留まっている。筆者の勤務する鹿児島大学においては、文系学部の法文学部、教育学部においては第2外国語の履修は必須であるが、他の

多くの理系学部においては、理学部地球環境科学科を除いて、ほとんど習得されていない。確かに独語、仏語等の多くのインドヨーロッパ系の言語は、英語に比べて名詞の男性、女性、(独語においては中性)の区別、その他複雑な動詞の語尾変化及び複雑な文法規則により多くの学生から嫌われる傾向が強かった。しかしながら歴史的に見て、英語は本来独語と同じゲルマン系の言語であり、多くの点で共通点を持つ。また、仏語は1066年のノルマンコンクエスト (Norman Conquest) 以来、多くの仏語が英国本土に流入し、英語の語彙に大きな影響を与えた。それ故に、英語の理解を深めるためには独語、仏語の基本的知識は極めて重要であると筆者は考える。

しかしながら、最近の英語教師は英語のみしか学習した経験がなく、昔に比べてその応用力を生かす力が若干劣っているように思われる。一方独仏語の先生方は、英語に加えて独語、仏語の知識も持っておられるので、その応用力が一般の英語教員よりも広い。従って筆者の個人的意見としては、大学設置基準として、第2外国語習得を再び必修のものとし、さらに選択科目として中国語、韓国語、スペイン語、ロシア語などの多くの外国語習得の機会も広く提供する必要があると考えている。²⁾

冒頭でも述べた通り「外国語を知らないものは自分の母国語も知らない」というゲーテの指摘は極めて重要である。特に、英語が国際語として世界的にあまねく使われていると考えている一部の英語母国語国民は、一般に外国語や外国の文化にも学ぼうとせず、自分の母国語である英語と文化

的価値観を押し付けようとする傾向が一部に見られる。しかしながら、筆者は英語を職業とする人間ではあるが、いわゆる英語一辺倒の英語帝国主義者ではない。英語はあくまで主要外国語の一つであり、国際語としての重要性は認めるが、国際会議の場において使用される英語は、あくまで国際コミュニケーションのツールであり、偏った方言や俗語、スラング等は使用されるべきでないと考えている。その意味ではカナダにおける英語と仏語の公用語としての併用は、外国語及び外国文化の習得のための有効な一例と思われる。

Ⅲ 独語と英語の関係について

独語と英語は同じゲルマン系に属する言語であり、多くの機能語や基本的な内容において共通点が多い。具体的には英語の“sing”に独語の動詞形成語尾“en”を付けると“singen”(歌う)となる。その他にも英語の“have”は独語では“haben”であり、極めて類似している。さらに日常の簡単な言い回しにおいても、英語の“good morning”は独語では“guten Morgen”であり、“good night”は“gut Nacht”となり、ほとんど同じとっていいほどである。基本的な内容語においても、“father”が“Father”、“son”は“Sone”とほぼ同じである。従って英語から独語へ語学的知識を広げることは、それほど困難ではないかもしれない。またドイツは自然科学においても人文科学においても、さらには芸術面においても、数多くの人材を生み出している。歴史的にも日本との関係は大きく、ドイツ語およびドイツ文化を学ぶことは、日本人にとっても重要なことと思われる。³⁾

Ⅳ 仏語と英語の関係

仏語は本来ラテン系の言語であり、英語とはその起源を多少異としているが、1066年のノルマンコンクエスト(Norman Conquest)以来、大量の仏語が英国本土に流入し、英語という言語に多大な影響を与えた。機能語や主要内容語においては英語と独語に共通点が多い一方において、英語と仏語の共通点は、やや困難で高等な内容語において、仏語からの流入が見られる。具体的には、「甥」、「姪」を意味する“nephew”と“niece”さらに「従兄

を表す“cousin”、「おじ」、「おば」を意味する“uncle”、“aunt”等の単語は英仏で共通するものが多い。

動詞においては、与えるを意味する英語の“give”は独語の“geben”に由来しているが、「寄贈する」を意味する“donate”は仏語の“doner”(与える)に由来するものである。臓器提供者を意味する「ドナー」は仏語に由来する典型的な一例である。さらに日本語にもしばしば使われている「クーデター(coup d'tat)」は「状態に一撃を食らわす」という意味の仏語であり、世界的にも広く使われている。また心理学において「幻想」を表す「デジャブ(déjà vu)」は英語に直せば“already seen”(既に見られた)の仏語である。ちなみに「ラルクアン シエル(l'arc en ciel)」は、英語式に言えば“the arch in the sky”を意味する“rainbow”である。

単語の成り立ちにおいても、仏語の知識は英単語の理解に非常に有効である。例えば、“important”は英仏共通の単語であり、「重要な」という意味は誰でも知っているが、その成り立ちを知っている人はあまり多くない。分析してみると、接頭辞の“im”は「～の中へ」を意味し、“port”は「港」の意味である。最後の接尾辞“ant”は英語で言えば現在分詞の“ing”のことである。まとめると「港の中に入りつつあるもの」、つまり「地元にないから外から運び、港の中に入りつつあるものであるから重要なもの」という意味を表す。このような例は枚挙のいとまがない。⁴⁾

文法的な時制においては、英語の動詞の語尾変化は現在形、過去形、及び過去分詞のみであるが、独語仏語においては、動詞の現在形、さまざまな過去形、さらに未来形が存在する。これは非常に重要な違いである。従って英文法の重要な事項として「時または条件を表す副詞節においては未来においても現在時制を用いて表す」という規則があるが、その説明も独仏との相違を参照すると理解しやすい。つまり、もともと英語には動詞の未来形はないのであるから、英文法においては、未来時制を言及する必要はないのである。一部の英文法学者は、英語の未来時制に関して、独仏語の文法的相違を参照しつつ説明する人も存在する。

Ⅴ 第2外国語学習の効果とその利用について

次に独仏に限らない第2外国語学習の可能性について考えていきたい。一般的に大学に入る前には、学生は英語のみを学習し、またリスニング、スピーキング等の実用的な技能を学ぶ機会があまりない。ALTなどと呼んで授業をしてもらうことはあるが、定期的に行われているわけではなく、その機会も非常に少なく、主として入試のためのリーディングに特化した授業を受けている傾向が強い。そのため、本来英語学習は4技能（リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング）をバランスよく学ぶ必要があるのだが、実際にはいびつな学習を受験勉強で経験しており、英語に対する印象は良し悪しさまざままである。

一方、大学で第2外国語を学ぶ場合は、基本的にゼロからのスタートであり、また単位の成績を気にする以外、第2外国語に対する気後れは少ないと思われる。また、英語以外の言語を学ぶことで、新たな観点に気づくこともある。例えば、中国語は英語と文法体系が似ている部分があり、一見別種のものに思える言語にも前述した仏語・英語、独語・英語間の語の類似のように共通点が見られる。⁵⁾

このような新たな発見、気づきは学習意欲の増大につながる事が多く、英語と同時に学ぶことによって、将来良い影響を与える可能性も多い。かつてはバイリンガルになることが国際社会に出るために必要と言われてきたが、現在の人種の多様性、バリアフリーとなりつつある世界では、日本人にとっては英語ともう一つの言語を習得することが重要になるかもしれない。いわゆる多言語主義の到来である。それを考えると、英語一辺倒の対応では英語を母国語としない話者に対して信頼関係を築くことは難しいかもしれない。言語はコミュニケーションの重要な手段の一つであり、21世紀の国際化時代においては、マルチリンガルになることはそれだけ活動の幅を増やすことになり、より広範囲に活躍する場を得られるきっかけとなるであろう。

さらに、大学院入試における第2外国語の利用は、一般的に旧7帝大を中心に行われている傾向がある。特に文系の大学院入試多く行われており、仏語、独語を中心に露語、伊語などもある。例え

ば東京大学の2014年度の人文社会系研究科修士課程募集要項では、上記の言語に加え、露語、西語、韓国語、中国語があり、幅広い選択肢をもたせている。また大学院入学試験科目ではなく、外部機関の語学能力試験の成績証明書を大学院入試に取り入れている大学もある。このように形式形は変わっても、第2外国語を求める傾向は現在でも見られる。

VI まとめ

以上これまで述べてきたように、英語の理解を深めるためには、語彙的にも文法的にも独仏語の基本的知識は不可欠と考えられる。また、国際的に活躍するためには、英語以外の言語の習得も必要と言える。もちろん一般的な英語学習者としては、バイリンガルあるいはマルチリンガルを目指す必要はないが、基本的な文法、語彙事項の習得は英語学習者としても重要である。現代は英米を中心とした文化の影響が強いが、独仏もそれなりに独自の文化を有しているのであるから、それらの文化を尊重していく必要があるであろう。

最後にフランス文化が世界を制したもののひとつにメートル法がある。アメリカにおいては、未だにメートル法があまり普及していないが、これはゆゆしき問題と考えられる。オリンピックにおいても、主要な外国語はフランス語であり、その次に英語でのアナウンスが行われ、競技はメートル法によって行われている。1974年にユネスコ教育勧告の精神を今一度思い出して、国際的な認識を持った異文化理解の態度を推進してゆくことが、外国語教師の使命と考えられる。⁶⁾

参考文献

- 荒木昭太郎他編(1977)『フランス語基本単語 3469』東京 大修館書店
 小林正(1979)『フランス語のすすめ』講談社現代新書 東京 講談社
 樋口晶彦他編(2006)『21世紀の英語科教育』東京 開隆堂出版
 藤田五郎(1977)『ドイツ語のすすめ』講談社現代新書 東京 講談社
 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 外

- 国語編』東京 開隆堂出版
- 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京 開隆堂出版
- 文部科学省 (2009)『高等学校学習指導要領』東京 東山書房
- 高橋健二 (1979)『ゲーテ格言集』講談社現代新書 講談社 東京
- 田辺保 (1979)『なぜ外国語を学ぶか』講談社現代新書 東京 講談社
- 山川丈平 (1976)『山川ドイツ語文法初歩 (Deutsche Grammatik)』同学社 東京

注)

- ¹⁾ 高橋 (1979) p.116 なお、冒頭に引用した格言以外にも、ゲーテの格言には、外国語学習に関する貴重な名言が多数見られる。また田辺 (1979) にも、外国語学習の目的に関する興味深い指摘が随所に見られる。
- ²⁾ 大学等の高等教育に限らず、日本の小・中・高等学校での外国語学習の目的は、文科省の学習指導要項に記載されているが、その趣旨としては、「外国語 (英語) を通して、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り」の箇所では共通している。詳細は参考文献を参照。
- ³⁾ ドイツ語およびドイツ文化についての概説は、藤田 (1977) および山川 (1976) に詳しい。なお、ドイツ語では名刺は大文字で書き始めるので、本稿もその規則に従った。
- ⁴⁾ フランス語およびフランス文化についての概説は、荒木他 (1977)、小林 (1979) に詳しい。
- ⁵⁾ 中国語においても、「父」、「母」は「パパ」「ママ」と発音する。
- ⁶⁾ 「ユネスコ教育勧告」については、樋口他 (2006) の第13章「異文化理解教育」に詳細が述べられ、「すべての教育に国際的側面と世界的視点を持たせる」等の7項目がまとめられている。まさに外国語学習と異文化理解教育の原点である。